

神奈川県現代俳句協会会報

第163号
令和6年3月発行

トピックス
第40回俳句大会講演記
諸家近詠
サミット短信
俳人交遊録
結社便り
湘南サンシャイン句会
吟行会報告
春の一句



第40回俳句大会

講演記

令和五年十一月二十四日
於・かながわ県民センターホール

「石牟礼道子俳句についてー畏怖する魂の渚」

武良 竜彦

〈高野ムツオの『語り継ぐいのちの俳句』をめぐって〉

今回は私のライフワークの、石牟礼道子文学を含む俳句作品についてお話させていただきます。その主旨は、俳句表現に向かう基本的な姿勢として、命の尊厳、社会との葛藤、その喜びと哀しみも包摂する、存在論的な姿勢ということになります。それは石牟礼道子俳句の思想的な背景でもあります。私が所属する「小熊座」の創始者である佐藤鬼房が提唱し、それを今の高野主宰が継承している「人間風土詠」という理念でもあります。今日はその高野主宰にわざわざ聴講に来ていただき、私のことを先にご紹介いただいて、恐縮しています。



武良竜彦 講師
(撮影：宮永武彦)

高野主宰は震災後、『語り継ぐいのちの俳句』という本にも纏められて、震災詠をめぐる総括をされていますが、それもありまして、講演依頼が殺到して多忙な思いをされていて、私も拝聴しています。

今日は逆に、主宰の前で私が講演することになって、なんだか緊張しています。高野主宰の震災詠で有名になった代表的な句は、

泥被るたびに角ぐみ光る蘆
車にも仰臥という死春の月

というもので、生命というものの災害下で諸相が見事に造形表現された句ですね。このように佐藤鬼房が提唱した「小熊座」の理念と、石牟礼道子の俳句の背景にある思想は、深い所で響き合っているところがあると思うんですね。

石牟礼道子俳句の背景にある思想は、自然の中で生きる人間としての命と心の在り方に関わることなんですね。これが解ってないと、石牟礼道子俳句は難解でわけの分からない俳句なんです。

石牟礼文学に出会ったせいで、その文学的態度というのですか、視座が無意識に私の中に根付いてしまっていて、環境破壊問題を背景にした傾向の童話を書くようになってから、童話作家としての立場を危うくするような体験をしています。その問題意識が時代的にまだ共有されていなかったこともあり、エンターテインメント童話賞から出発した私が、純文学系の童話を書くことに、エンタメ系の童話作家の先輩、同僚や、児童向け雑誌の編集者から露骨な拒否反応を示されて、児童文学界に居辛くなったんですね。いきなり個人的なお話してしまいました。それが、それほど、石牟礼文学の先見性と影響力があったという、

文学にとっても普遍性のあるお話ですのでお許しください。

また「小熊座」の高野主宰との、若い頃の出逢いと交流があつて、私が俳句を始めたことと、石牟礼道子論をライフワークに決めたこと、とは深い関係があります。

ここからのお話も、しばらくは私の個人的な話の続きになりますが、石牟礼俳句の本論に入る前に、大事な伏線になると思いますので、私的な体験を中心に、しばらくお話させていただきます。

〈齋藤慎爾氏、黒田杏子氏との縁〉

私が現代俳句のことを知ったのは、大学生のとき高野ムツオ主宰に教わったのが初めてです。主宰とは同窓生で同じ学部学科、サークルが現代詩研究会でした。高野主宰は詩歌全般と民俗学、西洋の象徴詩を含めた文学全般に関心があるようで、他のサークルとも繋がりがあつたようですが、本命は俳句のようでした。当時、もう学生俳人として評価されているくらいの実力があつて、知る人ぞ知るといって存在でした。彼は俳句を目指している韻文命で、私は散文命という感じで。その頃は俳句なんてお年寄りのするものだと思っていたのが、金子兜太さんの俳句など読まされて、大変な驚きがあつたんです。でも俳句のすごさ、現代俳句のすごさを高野ムツオから教えてもらったのに、あまりにすごくて、これは特殊な才能が必要で、世界なんじゃないかと、足を踏み込むことができなかったんです。でもその後「小熊座」が創刊されると毎号送ってきますし、彼が勧めた句集や俳句評論を読むのは好きになりました。でもまず、これは下手に手を出すと火傷すると感じて、

俳句にはしり込みしていました。

後に「小熊座」に入会して、まだ一般俳人として投稿をしていた頃、高野主宰から文章を書く練習はした方がいいと言われて、高野ムツオ評論とか俳句時評を書かせていただきました。すると私の俳句時評を、尊敬する齋藤慎爾さんが、「すごい書き手が現れた」と、総合誌で名指しで激賞してくださいました。私が感謝して御札の手紙を書きましたらまた彼は句集をどーんと送ってきて、私はまた「すごい人がいるな」と、夢中になって読んで、彼の句集論を書いてお礼状を送りました。そうしましたらまた喜んでくれています、今度は齋藤さんの『陸地』という句集の朧に評文を書かせていただきました。これが私にとってはとても大きな出来事です。黒田杏子さんから突然電話をいただきました、「黒田でーす」って、『陸地』で齋藤慎爾のことをすごい戦後文学論みたいによく書いてくれたから、「私のことのようにうれしくって、代わりに私が電話したの」って、超高速会話体で一方的にお話されました。それがお付き合いの始まりで、齋藤さんから、僕が石牟礼道子をライフワークにしていると聞いていたら嬉しいです。そこで「うちの『藍生』に石牟礼道子のこと、なんでもいいから書いてよ」と言われました。その時に、「あつ」と思いついたんです。実はこの『石牟礼道子全句集 泣きなが原』が世に出ることになったのは、黒田さんのおかげだと、句集の後書き資料で知っていたんです。藤原書店の社長、藤原さんに黒田さんが直談判して出版が実現した。藤原書店は「環」という、環境問題を社会論的に提示した雑誌を刊行しているんですね。文学もちゃんと取り上げなさいと常々黒田さんが藤原さんに言っていて、その代わりに石牟礼文学を本気でやれとあって、まずは『石牟礼道子俳句全集』が出て、その後、全十七巻におよぶ『石牟礼道子全集』を刊行したわけです。

これが私の大事な事件なんです。私はライフワークで石牟礼道子を研究してましたけど、彼女が俳

句をしているのを知らなかつたんですよ。それで、「黒田先生のおかげだったんです」と言ったら、「そうよ」って、それからの交流でした。

私は石牟礼道子論というのは、社会論、社会性を帯びた現代文学論として書くものだと思います。てたんです。だからそれを発表する場がどこにもなかったんですが、黒田さんに言われて、その時に目が啓けました。石牟礼道子文学を俳句を軸にして読み込んでいく。俳句はいろいろな作品群に分かれているんですけど、ひとつひとつの作品集が、実は彼女が書いた膨大な小説世界ときっちり対応している。それまでいくら読んでも難解だなと思っていた句がわかつてくる。ということは、石牟礼俳句というのは、俳句だけ読んでたんじゃあわけわからない。俳句は僕には無理だと思ってたけれども、石牟礼道子を論じるためには俳句のことがわかつてないといけないと思っただけですね。それで勉強しようと思つて、「小熊座」の門を叩いて、最初は投稿欄から始めて、だんだんわかつてくるわけです。作ることと評論することは感覚的に違うなとわかつてくる。わかつてきたけれども、フリースクールに招かれて子供たちに俳句の授業をしましたけど、講義はできる、解説はできるんです。その時に私が使っているのは論理語なんです。私の文章が文学語になったのは、この、石牟礼道子の小説や随筆を読んでただけでは開けられなかった扉なんですね。俳句を読みこんだおかげで、文学の文章というのとはそんな風に書くもんじゃありません。とわかつてきた。ところが石牟礼道子俳句に限っては、俳句のイロハを学んだだけじゃ読み取れない、そのことは後でお話します。それを解説なしに読んでも絶対わからないと思う。これは保証します。

〈石牟礼文学との出会い―『苦界浄土』〉

一九六九年、石牟礼道子の最初の『苦界浄土』が出版されます。水俣出身で母方に水俣病の被害者がいる私は読まずにいられず、読んで衝撃を受

けました。私の母方の両親は網元で、大矢村といって、水俣よりちよつと北にあった、一つの村の網元でした。漁師の世界というのは男女の差、身分の上下もなくて、原始世界がそのまま来ている、皆で働く、共同作業をします。近代化された農家とは空気が違いますね。私は子供の頃、母方の大矢村に連れて行ってもらうのが大好きだったんです。というのは、私が生まれたのは水俣市を見下ろす丘の方で、水俣チツソ工場が全部見えたくらい煙が出て、いつも薄雲がかかっている。うちは高いところにあつたものですから、ふもとに降りる、町に行くのが嫌でした。坂道の途中から空気が匂うんです。どぶ川に浸かりに行くように匂う。小学校上がる前の四、五歳から、小学校一、二年ぐらいまでの記憶です。石牟礼道子と同じで私は幼少の記憶がくっきりあるんです。母が実家に里帰りすると、私は幼稚園ぐらいの時ですから、親戚のおじいさんおばあさん、ちよつと年上の子供たちから可愛がられたんですね。ご飯もおいしいし空気がおいしいし、ここは天国みたいだと、その落差。母方の実家は、いい記憶しかなかったんです。水俣は工業化によって大量生産、大量消費の走りみたくて、その落差がありすぎて、軋轢を克明に覚えていきます。そしてその一族が、全滅しました。想像できますか？大矢村という村が全員死んだんです。私はその後なかなか行くことができません。大人になってやつと行ったら、村ごとないんです。手前には大きな道路ができていて、そこで暮らしていた、あの細やかで美しい世界が消されてしまった。それを消したのはなにか、戦後の工業化一本で、自然なんか、人間の都合のいいようにしていいという思想が殺した。すると犯人は私たちだ。私が母方の一族の大矢村の一族を殺したんだと。私は思い出したくなかつたんです。忘れよう。あんなことはどんなふうにしても言葉になんかできないと思つていたわけなんです。

それを石牟礼道子は『苦界浄土』で言葉にしたんです。びっくりしました。今話した漁師さんたち全部に、聞き書きで書いている。被害にあった人たちが全部訪ねて歩いて、友達になっているわけです。そこで体験を、苦難の話を書く。胎児性水俣病のお子さん、お母さんもいずれ亡くなつて。そんなこと嫌でしょう？つらいから、聞くの。私は嫌だし語るのも嫌だし、忘れようとしてたんです。ところがそれを『苦界浄土』で読まされて。自分が書いていた詩とか童話が書けなくなつてしまった。いわば文学的な失語症にかかつて、書けるようになるのに三、四年かかりました。

大学を卒業してから、私は水俣病、環境問題にかかわるのは嫌ですから、宮沢賢治のイーハトーブをSFチックに書いた童話でデビューしました。その間でずつと高野主宰から教えてもらった俳句も読んできましたし、石牟礼文学もずつと読んできました。だけど私は、石牟礼文学を振り払うために童話を書いていた感じなんです。そしたら、岩崎書店の初代編集長が、私の書く童話を「あなたちよつと影があるよね、童話なのに」と気に入ってくれて、この路線は誰もいないから頑張つて書いてねって励ましてくれたのが唯一その人でした。その人が、子供の暮らしのいろんなジャンル、テーマ別の童話アンソロジーを発行したいと。それには「自然」というジャンルもあって、「武良さん、環境で書いてくれないかな」と言われました。僕は水俣の体験は絶対話していません。でも書いてみないかと言われて、「へんじのない手紙」という、水俣病を背景に、私の実体験の話を書きました。水俣の漁師村での楽しい暮らし、漁師の子供である副主人公と、私は加害企業のチツソ工場の労働者の息子である二人が手紙をやりとりし、水俣病のことを違う立場で書いた話です。チツソ工場というのは水俣市の三分の二ぐらいでした。工場をぐるっと、「会社川」と呼ばれて、お堀のように取り囲んでいるのが、工場の排水を海に捨てるための川でした。いつもどぶ臭い匂いがして泡

を吹いていて、潮が満ちてきたらそれまでためていたチツソの廃液が一気にどつと出ていく仕組みです。そして土手の上の方は草地になっていて、草が青々と茂つてたんですね。僕は漁師の子と当時兔を飼っていて、そこで草を刈つて兔にあげてたんですけど、その兔が目の前で、のたうち回つて走り回つて、最後には石垣に頭をぶつけて死んだ。それを二人で目撃して血の気が引いたんです。何が起こつたのかと。その光景は後に、水俣病で亡くなる方の、その断末魔と同じだと、その実体験を書いたんです。チツソの附属病院というのがありまして、これは工場の廃液が原因なのではないかと疑つて、病院の中庭に実験の檻を作つて、野良猫に毎日毎日水俣湾で獲つた牡蠣を与える実験をやつてたんですね。私は水俣病の影響もあつて、たまたま病気でそこに入院していた時に、その猫が廊下に迷いだしてきて苦しんでいるのに遭遇しました。なんだこの猫はと。体を震わせて、痩せこけているし。お医者さんが飛んできて、「その猫に触つちやつたらん！（いけない）」と。後に、「水俣病猫痴呆」と呼ばれました。そのことも織り込んで童話を書いたんですね。『星降る夜に聞いた歌』という児童文学アンソロジーの作品をみんなで応募するわけですが、五人の編集委員が、エンタメ系出身の童話作家ばかりで、多数決で僕の「へんじのない手紙」を落とすしちやつた。「そんなもの子供に読ませるんですか」と。そこで編集長が怒つて、これは悪いけど編集長権限で載せさせてもらおうと、「自然編」の編の巻末に滑り込みで入れてくれました。それが私のターニングポイントになるんです。それまではちよつと面白い、目先の変わった童話作品だったのが、そこから変わるんです。

石牟礼道子と熊本の評論家の渡辺京二が『苦界浄土』を世に出すために出版社に持ち込むんですが、大手の出版社はこの作品を理解せず、相手にしないわけです。その時代は今日のように環境問題が人間の精神に悪影響を及ぼすなんて思ってい

ません。ただの気持ちの悪い話だと思つてないから、相手にしないんです。

その後私は、それまで懇意にしていたエンタメ系童話の先輩たちから白眼視されるようになって。それ以後は、意識して環境破壊が背景にあるような童話を書くようになりましたが、原稿はほとんど突き返されました。決定的だったのは、福島第一原発事故が起こるはるか前ですけれど、原発事故が起こるといふ話を書いて、これはひどい目にあいました。童話だけでは食えないので、学習参考書の企画で、社会のサブテキストの仕事などを担当していました。その仕事をしていた時、「電気が家庭に届くまで」といふのを担当して、原発はどうやって発電しているんだろうなどと、原発に取材、見学に行つたんですね。

要するに原子炉というのは、冷却装置を失つたら間違ひなく爆発するんだと、一番の弱点だと、その時学習したんですね。そこで舞台を九州にしまして、霧島の普賢岳と桜島が同時に爆発して、南九州全体が火山灰に覆われて、その火山灰のせいで原子炉が冷却システムを失つて爆発するという話を書いた。そこに暮らす子どもたちというのが、私の母方の、ユートピアだと思つている漁師町の子どもたちで、津波とか地震とかには皆で助け合つていたんですけど、放射線を浴びた後、全員死んでしまいましたという、そういう話を書いたら、「やめてくれないかなあ」と。『こんな話、児童雑誌に載せられると思つてるの』と。原稿を突き返される時、年下の編集者が「武良ちゃん、児童文学というのは、向日性の文学なんだよ」と。「どんなにつらい話でも、最後は子供たちが希望を読むように書くのが児童文学のセオリーだ」と、まるで論ずように言うわけです。そんなこと知ってますよ。でも現実には、それで苦しんでる。その中でも耐えて生きてほしくて書いている。それを突っ返すんです。ワープロの時代じゃないですから、手書きで、その原稿は残っていません。

石牟礼道子が『苦界浄土』をまさに持ち込んだ

時も、大手の出版社は大部分が評価しませんでした。最後には講談社だけが出してくれました。

〔石牟礼道子俳句の世界〕

それでは本題の石牟礼俳句の紹介に入ります。

石牟礼道子の原点―もの狂いの情念

花びらも蝶も猫の相手して 「水村紀行」

猫たちと絆浅からず梅雨の夜

ボケツトで育ちし神の仔猫なり

老猫のいびきふところにあり夢や何色

死にゆくは誰ぞ猫たちが野辺送りする

まだ死猫ならざるまなこ星ひとつ

死ぬ猫のかがめば闇の動くなり

背中の毛ぞよよさせる猫看とる

石牟礼道子は猫が大好きだったんですね。猫が大好きというのが溢れている句ですね。ところが猫が死んだ描写もあります。人間が死ぬ気配を察知して、猫が悼んでいるという。要するに、死にゆくまで、顛末までちゃんと見届けないと気が済まない性質で。鬼気迫る表現で、愛猫の死の瞬間という時間丸ごと抱擁している句を詠んでいるんですね。死の瞬間に「ぞよぞよ」と体毛がぞよめく、猫の全的存在性が抱きしめられている句じゃないでしょうか。

作者が、猫と団体となって闇を動かしている。死を含む命のという存在の総体を、最後まで見届けずにはいられない眼差しが、石牟礼文学を貫く本質だと思います。それを私は「もの狂いの眼差し」と呼んでいます。

実は、彼女が水俣病と関わりをもつことになったのも、猫を介してなんですね。というのは、漁師さんたちは、漁の網が鼠に食い千切られる被害、齧害（げつがい・齧る害）と言いますが、それを防ぐために必ず猫を飼っていたんですね。石牟礼道子も人伝にその話を聞いて、自分の家の飼った猫が産んだ子猫を、人を介して漁師さんに上げていたわけです。

〔石牟礼道子文学の背景〕

彼女の随筆に「タデ子の記」というのがありまして、石牟礼道子は、戦中戦後に代用教員をしているんですね。鹿児島本園の水俣から二駅先まで通った時に、ボロボロになって打ち捨てられたような女の子がいた。怖くて誰も声をかけない。震災孤児で鹿児島島の親戚のところに行きなさいと汽車に載せられたわけですね。このままだと死んじゃうと、この子を背負って家に帰って、その子が元気になるまで介抱してあげて、帰した。帰した後も、付いて行ってあげればよかった、無事着いたかなと、そういう風に人のことを放っておけない。そういう性格なんですね。

折口信夫が、古来の日本女性の性質について次のように述べています。

折口信夫『古代研究Ⅰ』（角川文庫一九七四年刊）日本の歴史は、語部と言われた、村々国々の神の物語を伝誦する職業団体の人々の口頭に、久しく保存せられていた律分が最初の形であった。これを散文化して、文字に記したのが、古事記・日本紀その他の書物に残る古代史なのである。（略）神々の色彩を持たない事実等の、後世に伝わりようはあるべきはずがないのだ。並みの女のように見えている女性の伝説も、よく見ていくと、きつと皆神事に与った女性の、神事以外の生活を取り扱っているのであった。事実において、我々が遡れる限りの古代に実在した女性の生活は、一生涯あるいはある期間は、かならず巫女として費されて来たものと見てよい。

日本の女性が例外なくもっている、巫女という資質。それが石牟礼道子が水俣病に向き合った原点なんです。口誦伝承者である、ちゃんと書いてあるんですね。石牟礼道子が相手にしているのは、文字で伝わった伝聞の世界ではないんです。昔の漁村の漁師さんたちの文化というのは文字で

はないんです。言葉だけで暮らしている。古代から豊かに存在していた文字以前の文化、肉声による口誦文学こそ日本人の本当の文化だと、石牟礼道子はそこを言っているわけです。口承文化、肉声で語った文化のことが、喜びをもって克明に語られているんです。それを現代社会は破壊したんだ。私たちは失ったんだ。もう取返しが付かない。文字文化というのは担われている人が死んでも、文字が残っているから復元できますよね。ところが口承文学というのは、それを担っていた人が死ぬと、終わってしまう。そのことを日本人がわかっているかと。

最晩年、死の直前まで石牟礼道子が新聞に連載した、絵と俳句と随筆がセットになっている遺作を纏めたのが『石牟礼道子句・画集 色のない虹』（弦書房二〇二〇年刊）です。先にも申しましたが、多くのジャンルのの中から、最晩年の石牟礼道子を選んだのは俳句という形式でした。彼女が抱え込んでしまった社会性の伴う苦しみから、俳句によって癒され解放されていったのです。自分の小さいころの懐かしい記憶に彩られた最後の句画集を書くとき、楽しくて仕方がなかったと本人が証言しています。

『色のない虹』という、最後の句画集、これを見ているだけで、理解するのに私は一生かかりました。石牟礼道子は「俳句は自分自身と死者たちへの慰撫でもあった」と述懐しています。慰撫とは言っても、その内容は、死の想念と結びついた俳句群です。このような俳句を詠むことで慰められる魂とは、果たしてどんなものなのでしょう。

『苦界浄土』という公害との闘いから、最後の『色のない道』にいたるまで、文字文化なんて学習すれば誰でもできますから。ところが口承文学というのは担い手がいなくなったら終わりなんです。私たちはそのかけがえのない文化を失ったのだという、石牟礼道子の文学者としての主題。今日はそのことをお伝えしたいと思います。

（終わりに）

私の書いた石牟礼道子俳句論が現代俳句評論賞を受賞することになって、齋藤慎爾さんと黒田さんから祝福の嵐で。うれしかったですね。私の石牟礼道子文学論が完結したら、ご自分の深夜叢書社から出版してあげると約束していたのですが、完結しないうちに他界されてしまいました。

受賞して現代俳句に掲載されたら、私の「へんじのない手紙」という水俣病のことが背景なっている童話が載っている本も持って、熊本まで会いにゆくつもりでした。

今日は俳句だけになりましたけれど、また機会がありましたら石牟礼道子についてお話ししたいと思います。ありがとうございます。

（テープ起こし 山戸 則江）

【結社便り】 第十三回

「夢」

主宰 朧潤
宮田 洋子 記

夢は、昭和56年前田吐実男先生が鎌倉で設立した結社で、平成31年に朧潤が主宰を引き継ぎました。口語俳句を基本とし、日常あらゆる事象を題材に作者の感性を最大限活かしたオンリーワンの句を作り続けることを目指して研鑽しています。

現在、通信句会が主となっており、結社の習いとして同人・非同人関わらず、広く門戸を開いています。

同人作品

花の名も忘れるほどに老いにけり	植山 昭子
心臓も肛門もあり熟れ柘榴	大鋸 甚勇
汗拭う手首にゴム輪君眩し	田中 麻里
裸電球ゆれるたんびに寒くなる	八木 健
枯露柿の朱色食べた色	水上 佳星
老犬の眼と擦れ違う冬の街	山本 隆之
早春賦チェンバロが弾く主旋律	岡本 暢
彼岸花火傷するから触らない	朧潤

諸家近詠（到着順）

未完の絵

吉村 元明（ロマネンテンシエ）

天地無用初桃にほふ今朝の便
未完の絵花野にイーゼル立てしまま
赤き前緒すこし調へ七五三祝ひ
振り向きて旧姓名のる雪をんな

福来たる

青島 哲夫（青岬）

面白くなくても笑へ福来たる
春寒し底なしと言ふ戦かな
立春の狭庭に小鳥にぎはへり
たんぼぼの絮それぞれの旅に出る

無題

渡辺 照子（青岬）

別姓も良かり揃ひの冬帽子
諧謔を忘れぬために大根抜く
新聞の四コマ漫画に春来たる
私の主治医はわたし枸杞の花

ロシア

吉田 功（無所属）

初冬の翼傾ける羽田沖
海に手を翳す冬日鼓動なり
ロシア近し渡れそうな冬日和
地に残る遊びの線や春隣

鬼の国

浅 太郎（天籟通信）

蓮根の穴を通して鬼の国
春の陽に幸せ知るや孫膝に
陽春の青を五感に加えけり
閑古鳥答えられない問ばかり

えいこらと

横川はつこう（あざみの）

ぼろ市に買ひし時計と半世紀
えいこらと引けば腰丈おほ大根
七日粥土地の習ひの餅も入れ
この日和ガザには遠し懸大根

メーデー来

渡邊 紅華（無所属）

こころの緒どこかゆるびし蝶の昼
湖山の程好き間合おとし角
夫逝きて四十七年メーデー来
貌佳草この地に在りて幾年ぞ

初袴

山元志津香（八千草）

聖樹美しや生死ひしめくガザの子等
初袴の胸反りヴィオロン弾く乙女
じつちやまとばばのハグ佳しどんど焼き
余生とう入口は明日寒茜

プーチン

秋元 倫（無所属）

遠海の止まれぬ魚群去年今年
石段のいくつ神との距離寒し
「戦争と平和」を抱え冬籠り
プーチンの思考枯蔦引いてみる

春光

渡辺 和弘（草樹）

春光や心柱には届かざる
北斎の筆の強弱冴返る
ていねいに傘を畳みて春の昼
少年の一語が大事春疾風

下山

麻生 明（無所属）

銀杏黄葉舞って光とすり替わる
万両の照らす一隅禁猟区
冬鴟や下山のペース調える
人をみな凡庸にして落葉期

残る蚊

山本美恵子（紫）

残る蚊の刺しよるよると床柱
AI作銀杏黄葉を超ゆるのか
立冬や推しのコーヒー香りをり
短日やカレーを食んで知るとろみ

臘梅 吉田 典子 (齒車)

灯して灯して臘梅の帰心
手短なあいさつに置く柚子三個
夜の火事見てきて簡単な食事
白梅紅梅ふくらはぎから覚めてくる

土筆摘む 渡辺 正剛 (顔・岳)

雪降るや禿頭殊に淋しがる
溜池は蛙のお宿春兆す
土筆摘む無縁佛の荒地かな
生き甲斐はしたい放題たんぼば黄

気化 若林つる子 (無所属)

春障子気化のはじまる五体かな
執着を柔らかに梳く紫木蓮
負の連鎖絶った蟻から穴が出る
折り足らぬ折鶴折るや晩春

新会員紹介欄

冬うらら 芹澤しよう子 (無所属)

素手つなぎ心つなげる冬うらら
冬ぬくし亡舅かさなる夫の背
神様の今日の追伸冬茜

睦月 生田 暁美 (辻堂句会)

カサと手にふれし蠟梅香を握り
少年のけん玉の音冬の空
日本橋の手土産一つ切山椒

早春賦 占部美土子 (無所属)

薄氷のパリン微かな水の息
落椿明日から別の道を行く
菜の花に心預けて握り飯

サミット短信

辻堂句会

伊藤 梢 報

第三〇四回

於・明治市民センター
令和5年11月26日

桐一葉落ちて余白の人生論	安藤 靖
病む姉を見舞ひし泪冬ぬくし	生田 暁美
男ばかり足を入れたり掘炬燵	岩田 信
オーボエは冬を呼ぶ音歓喜して	占部美土子
八十路過ぎあれもこれも冬構	岡田 良子
蘊蓄を今日も聞かされ落葉蹴る	奥村 純子
寒林に農婦の声の良く通り	金栗トモ子
脳死なら献体してと秋芙蓉	土岐 詳恵
菊の香や五百羅漢はみな真顔	中村まさえ
寒月や白き灯台屹立す	野口美穂子
一夜にて走り根隠す木の葉かな	平山 圭子
無為という豊かな時間秋の海	藤方さくら
AIのアトム飛び立つ冬満月	星 由江
水を買ふ暮らしに慣れし冬うらら	柳 蒼柳
三瀬川渡る身支度年の暮れ	渡辺 正剛
冬瓜や変身するを夢見てる	伊藤 梢
一枚の落葉を今日の思い出に	令和6年1月27日
第三〇五回	藤方さくら
初雪や残り時間の透けてきた	安藤 靖
双六で有つて良かりし地雷踏む	生田 暁美
少年のけん玉の音冬の空	石鎚 優
一遍に会ひたや橙たわわなる	岩田 信
金柑を転がす婆の手は少女	占部美土子
新年に余白信ずる余生かな	大本 尚
留守居して鍋釜洗ふ女正月	岡田 良子
無垢な雪積りてゆくや能登の地に	奥村 純子
受け入れて家族四倍地震寒波	金栗トモ子
国境に戦車ズラリと年新た	佐々木重満
冬耕や古き心根解き放つ	

俳人交遊録

第十六回

「あの日の感動」

長島喜代子 記

漢詩の会で那須一泊の旅でした。

紺の暖簾に白字の染め抜きでひらひらと俳句が揺れているのを今でも鮮明に覚えております。ちよつと素敵なラーメン屋さんです。暖簾の俳句「くろもじの花のうすらな空のこと」とあり、太穂と落款が押されて、和風な感じのラーメン屋さん。すっかり気に入って、隣り合わせた人物が「風鈴」の青木千秋主宰であることを後々に知る。そつと差し出された本が正に俳誌でした。その頁を繰ると知人の名が飛び込んできた。同名かと思つたが早速確かめの電話を入れた。昔の元気な声が向こうで笑っている、まぎれもない知人でした。名前は片山八重子さんといひ、お住まいは鶴見市場で駅から十分程度歩きます。マンションの三階でした。そこがいわゆる「風鈴」の鶴見支部で、支部長としての指導者に・・・超ベテランさん。本棚にはぎっしりと見覚えのある俳誌が並び整理され、一目で実感できました。文学的な話が得意で言葉に力が入り解りやすく説明もし、料理の方も近所の皆さんと食べる会を作つて楽しく毎日を過ごしている事を知り、嬉しさがこみ上げて来ました。平和そのものです。

人間って言葉に生かされ、言葉に生きているのよと一語一語響きのある口調で教えてくれた。

それから少しの間のあり、思いもよらぬ新人賞・結社賞を賜る。その後現代俳句協会への入会となり会員となる(その時代入会する際の選挙があり)。そして今は自分の句会を持ちながら、この頃は小学生、中学生に俳句のお話をする機会を賜り、足を運んでおります。いつの日にか若者が俳句の道をめざしてくれる日を楽しみにしております。

新海苔の帯のまぶしき白さかな

土岐 詳恵

齒固めの干柿食後にもう一つ

中村まさえ

寒見舞まずは鎌倉鳩サブレー

長島喜代子

冬薔薇何故か胸中刺すような

野口美穂子

芒原受け流せよのメッセージ

平山 圭子

枯草のしきりに流れ街の川

廣田 洋一

引き寄せば更に転がる毛糸玉

星 由江

初鳥鳴いて今年も目覚めけり

柳 蒼柳

個室個室蒼蒼天 寒薔薇

りょう

絵馬かたかた風の表裏や受験生

若林つる子

左義長は猛り神輿の裸衆

渡辺 正剛

寒夕焼け眺めるばかり遠き地震

伊藤 梢

◎連絡先：事務局佐藤久まで

みなとみらい句会

菅原 若水 報

於 横浜市社会福祉センター

第四〇六回

令和5年12月9日

長生きは一長一短年の暮

岩田 信

短日や全速力の帰り道

上野 京子

日記焼き灰を土へと十二月

金栗トモ子

投げ銭のぼんと音して木の実落つ

里見 美季

玄関に鍵かけ忘れ小春かな

菅原 若水

江の島しぐれしばらくは猫といる

長島喜代子

年末のキックバックという軌道

芳賀 陽子

十二月八日戦語らず逝きし父

藤方さくら

消しゴムで消せぬ叫びや冬夕焼

町野 敦子

命一つ米寿の我と枯蠅螂

三沢 容一

高尾山こころで切り取る冬景色

宮永 武彦

江戸前は短気シャシャンと西の市

若林つる子

道草は余生の糧なり冬うらら

渡辺 正剛

第四〇七回

令和6年1月13日

後ろからついてくる音初詣

岩田 信

去年今年女は元氣チョコまんじゅう

上野 京子

政治家の御化けゾロゾロ去年今年

金栗トモ子

散らばって屏風の金か初雀

里見 美季

冬桜あの世に句会作りませう

菅原 若水

奔放に散る山茶花はき・ら・い

関根 洋子

白菜を二つに割って恋の予感

長島喜代子

居酒屋の悴んでいるお品書

芳賀 陽子

初場所や力士の乳首立っており

藤方さくら

かけ声も一緒に積んで初荷かな

細貝 昭吾

数列の一つ欠けたる軒つらら

町野 敦子

四日はや初荷のごとくゴミを出す

三沢 容一

外套の居ならぶ背中コップ酒

吉村 元明

若水が苦水となる能登の地震

若林つる子

一気呵成卒寿は熱燗飲み干せり

渡辺 正剛

◎連絡先 菅原若水 s-shirya@sf.dion.ne.jp

まで一報ください。折り返し「句会へのお誘い」をお送りいたします。

星川句会

金栗トモ子 報

十二月

令和5年12月4日

海鼠腸や理屈通してくたびれる

麻生 明

別れて朝の月見る初冬かな

石鎚 優

反戦歌静かに奏で星月夜

大塚 真紀

十二月の声留守電を聞き直す

桐山 芽ぐ

寒雀素人寄席のあざやかに

栗原嘉一郎

枯芝を踏むたましいの温むまで

菅原 若水

レノンの忌こころ任せに駆ピアノ

里見 美季

魂をしっかりと抱いて凍つる蝶

長島喜代子

ピアノ教室生徒ひとりのクリスマス

藤原真理子

穴もたぬ熊よおまえも不眠症

町野 敦子

噓して思わず本音飛び出しぬ

渡辺 順子

落花生しがらみ連れて抜かれけり

金栗トモ子

一月

令和6年1月8日

牡蠣売りの男の前歯欠けており

麻生 明

けさの春土に還らぬものの群れ

石鎚 優

人生を重ねしドラマ冬すみれ

桐山 芽ぐ

ゆるぎなき人生八十雑煮喰う

栗原嘉一郎

茹物をきっちり締める寒の水

里見 美季

初雪や聖書にマナの奇跡あり

菅原 若水

薄氷に閉じ込められし昼の月

長島喜代子

立ち読みのページをめくる指の冷え

藤原真理子

のどぐろの一夜干し食ふ能登は雪

町野 敦子

御降やシフォンケーキに粉砂糖

渡辺 順子

丹田にため息あふれ白き息

金栗トモ子

◎毎月第一月曜日 星川駅下車「かるがも」または「アローズ」で開催。

◎連絡先：事務局佐藤久まで

丹沢句会

竹村 半掃 報

十二月

順不同・秦野市西公民館

針供養まだ残しておく刺繍糸

三橋 伸子

どこまでも変異自在やシクラメン

澁谷 徹

秋の蝶雄叫びしつと剥き出しに

佃 悦夫

だったんを流れゆくつばきあぎと上げ

與 起

刻一刻多摩の夕映え鍋雑炊

木村 菊

ときどきの無言電話や雪女

岡本 保

氏神の銀杏落葉が本音見せ

飯田美枝子

水鳥は文鎮 白紙のような池の面

尾崎 竹詩

この世をば気丈に生きし枯芭蕉

立石 采佳

退屈で裸木謀反を考える

加藤かほる

蛇穴にMRIに人は入る

田畑ヒロ子

忘れやすい恋ばかりしてクリスマス

篠崎 妙子

仏恩は母の懐山眠る

北村 文江

推し活を始めようかと寅彦忌

いけ まり

今すでに内心夜又と冬紅葉

菅沼とき子

枇杷の花傾いている突っ支い棒

長谷川昭放

はしやぎすぎしかられそつとやぶうぐいす

羽田 勝二

麦の芽や循環小数の並び

佐々木重満

冬鶯や鳥獣戯画に迷ひ込む

竹村 半掃

一月

次の世は有りそで無さそでおでん酒
小春日や御幸の浜にサキノホン

白菜漬味の決めての塩加減
陽光に海を見つめる冬の薔薇

川島由美子
佐伯 悦子

インターネット句会
十一月句会
冬夕焼わたしの影を連れ帰る

宮永 武彦 報
町野 敦子

丹沢の幽かな寝息聴きに来た
煮凍りをくづす人の世の蟠り

味わいは水で決まると岩魚焼く
一番星師走の一日逃げてゆく

佐藤 鈴代
佐藤 廣枝

日向ぼこだんだん影がまるくなる
混声のなかにソリスト虫の秋

江原 文
吉村 元明

絶叫はじつと我慢を寒昂
数式は無縁葉牡丹の渦美しき

美しき幻夢宿らせ曆壳
銀杏を炒ってヒスイにする愉快

菅原 若水
菅原 若水

山の道を通りてここへ帰る花
腕白の追ふて追はれて落葉かな

多々木重宏
麻生 明

まよなかのなまこ 深紅のものおもい
大断層辰年の初春目を覚まし

くさや焼く輔祭の酒肴
数え日や芝浜という取りの芸

関戸 信治
ダイゴ 鉄哉

妹がどこかにしまつた罌雲
折鶴解く四角い平和御講風

平田 薫
金栗トモ子

辰年の元旦能登の暴れ龍
初場所や休場明けの土俵入り

木枯や犬の決めたる散歩道
手芸店取ってはもどす毛糸玉

花澤ちいこ
星 裕美子

神迎土産はたぶん赤い糸
小春日や隣の嬰が横腹蹴る

菅原 若水
田中 治夢

初鏡晴れ着と髪と虹色に
幸せて溶けてゆきさう雪女

抜く洗ふ揃へる芸に大根干し
煮凝りの中の目玉ににらまれる

三沢 容一
武良 竜彦

ぢぢばばの永き抱擁吾亦紅
冬に入る善玉菌を増やさねば

石川 夏山
石川 優

初日の出弟橘媛の海静か
ぎりぎりの余白に迫る冬薔薇

湯豆腐や朝の決心ゆるびたる
一月

山田ひかる
1月20日(土)

山眠る白髪同土風の中
わが決意見守っている実南天

桐山 芽ぐ
渡辺 順子

袖時雨演歌に嵌まる齢かな
はつはるのにしのそらにもてをあわせ

流氷の泣き声きこゆ北の海
鱈酒や前世は象という漢

青島 哲夫
麻生 明

小町通りにラテン語溢れ冬うらら
十二月句会

宮永 武彦
宮永 武彦

相席は七面相の雪女
冬耕や思惟の塊ほぐすこと

まだ何か出来る気がする初御空
団欒をひと呑みにした元旦なり

植田いく子
斎藤佳代子

手なづけし愁ひを傍に冬籠り
文明は木を食い尽くし冬の蝶

瀬古 修治
江原 文

◎連絡先：長谷川昭放 080・5013・6618
Kumonomi.ne100ku@nkc.scn-net.ne.jp

あの日や乳を含ませ母となる
あの声の鳴来ておりお元日

佐藤 悦子
佐藤 鈴代

友の計や冬青空といふ泉
麦の芽や循環小数の並び

石鏡 優
佐々木重満

川崎句会
十二月

寒暁や細胞の声ヨガで聴く
救ひ主今年も生まれ聖夜かな

白井千代子
菅原 若水

龍よ！新玉の地球を捉へぬか
晩成の顔をしている狸かな

麻生 明
平田 薫

山田ひかる 報
於・川崎市総合自治会館

勝独楽の傷の一つは恋敵
年酒酌む「舟唄」流るカウスター

関戸 信治
花澤ちいこ

いくとせを古りし遺愛の冬帽子
冬の星地球の悲鳴聞いて来た

矢口 柊子
金栗トモ子

十二月 12月16日(土)

人間に脱皮のあれば大旦
導火線のごとき多摩川寒茜

三沢 容一
武良 竜彦

煤払ひ妣の写真が手を止める
大根は役者や足が大嫌い

石川 夏山
多々木重宏

葛枯れて裏のお山の失語症
寒卵いづもどこかにある不安

年頭をまずは敬語で整える
◎連絡先：事務局佐藤久まで

菅原 若水
山田ひかる

赤門を通り抜けするずわい蟹
ピーピーと知らせる沸騰雪催い

菅原 若水
町野 敦子

冬晴に手話する子らの笑い声
河豚刺や一枚二枚花が散る

大寒に生れて聞きしは軍靴の音
年頭をまずは敬語で整える

吉居 珪子
山田ひかる

赤門を通り抜けするずわい蟹
ピーピーと知らせる沸騰雪催い

菅原 若水
町野 敦子

芸風は師匠譲りや空っ風
芳しき銀杏落ち葉のはらはらと

年頭をまずは敬語で整える
◎連絡先：事務局佐藤久まで

山田ひかる

赤門を通り抜けするずわい蟹
ピーピーと知らせる沸騰雪催い

菅原 若水
町野 敦子

十二月 12月16日(土)

年頭をまずは敬語で整える
◎連絡先：事務局佐藤久まで

山田ひかる

赤門を通り抜けするずわい蟹
ピーピーと知らせる沸騰雪催い

菅原 若水
町野 敦子

喜寿傘寿マイク離さぬ年忘れ
街角で受けた親切冬の虹
雲のようにのんびりいこう冬日和

吉村 元明
須藤 節子
宮永 武彦

一月句会

春近し赤い鞆は旅が好き
夜間診療温めなおす雑煮餅
枝振りのくの字くの字や梅ふふむ

江原 文
町野 敦子
光田久美子

激震の地より届きし年賀状
天罰を願ひに加ふ初詣
星冴ゆる無人ピアノのアベマリア

桐山 芽ぐ
瀬古 修治
吉村 元明

三寒四温合鍵を探しおり
客途絶ゆポインセチアの赫き鉢

金栗トモ子
矢口 椋子

寒中に勘冴えわたり万馬券
日記買ふ一日の重さ託す場所

須藤 節子
菅原 若水

刃物めく神奈川沖の冬鴉
山茶花の深紅に燃ゆる母ありき

麻生 明
石鎚 優

脳内の星また消える竜の玉
吊り橋をどなたと渡る雪女

石川 夏山
佐々木重満

木は春の支度を急ぐ飛行機雲
柿落つる嵯峨野の舎には去来居り

平田 薫
多久島重宏

春近しメロディーとなる胸の音
◎投句、選句、選評すべてインターネット上で行って
います。毎月第三日曜日投句メ切。

宮永 武彦

◎連絡先 宮永武彦 takehikom0410@gmail.com

磯子瓜句会

尾澤 慧璃 報

十一月
冬灯地図の折目にある飛地

於横浜市社会教育コーナー
令和5年11月22日

角打に混ざるムートンブーツかな

川野ちくさ
佐藤 久

浜焚火海女の乳房はしよっぱからう

鹿又 英一
尾澤 慧璃

立冬の空気閉ちこめ美術室
一月
折鶴の飛び立つ構へ春隣

令和6年1月24日
川野ちくさ

自転車籠に犬をり若菜摘
冬晴や寺で柏手打つをんな
壺焼の醤油の香り春近し
ほろ酔の脚のもつれや梅三分
屈折の冬の日差しや金魚鉢

池田恵美子
鹿又 英一
村上 裕也
長濱 藤樹
尾澤 慧璃

◎日 時 奇数月の第4水曜日 13時
◎連絡先 尾澤慧璃 KingLoveest@gmail.com

金八句会 十一月
穂すすきの空の果てまで翔ぶ構へ
割腹の作法正しく憂国忌
人口は案山子も入れて過疎の村
小説にならぬ一生実南天

杉 美春 報
石鎚 優
扇 義人
松浦 泰子
佐藤 久

よく眠るだけが取柄よ布団干す
黄落や映画のやうなピンヒール
かわらけの用途謎めき鳥わたる
小六月砂場はみ出す太平洋
冬の月光オルゴールの円舞

神谷 純子
尾澤 慧璃
里見 美季
ほりるる
栗林 浩

亡き人のメールを消せぬ暮の秋
小春日やサンキャッチャーの三原色
従順な十一月の抱き枕
行く秋のきれいに畳む包装紙

中村 光男
村上 裕也
なつはづき
杉 美春

十二月
分度器を持つて冬帝来たりけり
団欒の記憶の底の炬燵かな
いまもって改革途中着ぶくれて
まっさらな日付の行方日記買ふ
狐火や一村まるごと無くなりて
スケボーの打ち捨てられし師走かな
レクイエムに黒鍵多しレノンの忌
酔つ払ひに謝られたる懐手

佐藤 久
村上 裕也
里見 美季
神谷 純子
杉 美春
中村 光男
栗林 浩
尾澤 慧璃

寝返りの足が破りし白障子
着膨れの老僧経を飛ばし読む
山脈を抱きしめてゐる冬夕焼
鍵穴のない扉から鯨来る
◎毎月第一金曜日 夜八時より。ZOOM使用。
◎連絡先 杉美春 mi.harusugi@jcom.home.ne.jp

松浦 泰子
扇 義人
石鎚 優
なつはづき

湘南サンシャイン句会 堀口みゆき報
第95回 藤沢市民活動推進センター二階会議室
1月5日(金)

三度目の正月犬はもう大人
冬眠か誰も返事をくれない日
空つ風の吹き残したる山門朱
ゆく年の交番とブランコ仲良し
寒カント空手叩けり寒スズメ
帰るべき故郷はなし寒鴉
寒鴉ひと声かけてそれつきり
冬茜溶けだしている水平線
八十歳の音ごりごとごまめ囃む
初空や鳶の鳴きをりびーるるる
春近しメロディーとなる胸の音
寒風や一点となる鳶の声
元旦や自由自在に鳥は飛ぶ
初みくじ引きし最中の地震かな

安藤久美子
安藤 靖
石鎚 優
塵
菅原 若水
芳賀 陽子
日置 正次
保里よし枝
馬来まち子
宮永 武彦
山下 遊児
渡辺 正剛
堀口みゆき

湘南ブロック吟行報告

山下遊児 記
日時 令和五年十二月一日(月)
吟行地 新林公園および藤沢駅周辺
句会場 藤沢市民会館 第一展示ホール
講演 バイオリニスト小笠原伸子氏による
トーク&バイオリン演奏

当日は朝より晴れて絶好の吟行日和となった。
吟行地の新林公園は藤沢の中心部にありながら小



上：演奏風景 下：会場風景
(撮影：宮永武彦)

さな山の下に広がり、古民家や長屋門が移築されている文化的に価値のある公園であると同時に、鴨が行き来できる程の池や小さな田圃があり、風光明媚で、吟行には持って来いの公園である。コロナは終息したもののインフルエンザが流行している中、参加人数が心配されたが、現代俳句協会以外の方も参加されて、五十一名という大台を達成する事が出来た。

句会は尾崎竹詩会長の挨拶を皮切りに、講師のバイオリニスト小笠原伸子氏のトークと演奏へと続いた。通常ならば会場は緊張感が漂う時間であるが、蘊蓄のあるお話と音楽とで句会会場はコンサート会場に変貌していった。クラシックやポピュラーなど充分にバイオリン演奏を堪能できた時間であった。途中から堀口みゆきさんがピアノ伴奏に加わり、十二月の句会に相応しく「きよしこの夜」を合唱して講演の時間を終えた。

さて、清記用紙と選句用紙が配られて会場は一変して緊張感につつまれた。三十分の選句時間のあと、山下遊児と荻野樹美さんによる披露があり、続いて尾崎会長、大本尚さん、佐藤久さん、内藤ちよみさんによる講評、その後成績発表が行われた。

入賞者 十五位まで

- へつついに女の月日石路あかり 土岐 詳恵
 - 音合わせ中です森の百千鳥 尾崎 竹詩
 - 杏脱の石どつしりと冬に入る 荻野 樹美
 - 日をうけて明日への構へ冬木立 大本 尚
 - 薪小屋の薪の湿りや花八つ手 増井 智子
 - 冬麗やどこか淋しい釣瓶井戸 長島喜代子
 - ヴァイオリン聞かため踏む落葉道 金栗トモ子
 - 山茶花よ老ゆる毎澄む母の眼よ 小堀公美子
 - 海近き街に詩あり冬の鳥 栗林 浩
 - 冬さるる木目正しき自在鉤 渡辺 和弘
 - 朴落葉フェルトペンで書く手紙 杉 美春
 - くちべたを濃うせよふくろう早う来よ 田尻 睦子
 - コート脱げばむかしむかしと樹より声 内藤ちよみ
 - ちらかりし雲掃ぐごとく冬櫻 岡本 保
 - 静かさの鳴き合ふ鴨や水脈二つ 宮澤 進
- 以上 入賞おめでとうございました。

春の一句



(撮影：杉 美春)

- 天平の春こぼしけり花喰鳥 猪狩 鳳保
- 黄水仙石につまづき釈迦仰ぐ 安藤 靖
- ごみ収集車春満月を置き去りに 町野 敦子
- 風光る眺望の日があつて良し 日置 正次
- ぜんまいのほどけてあたり遠汽笛 内田ゆり子
- 喉を灼くみそ汁のあり梅の花 石鎚 優
- 境界を越えて弾けるしゃぼん玉 金栗トモ子
- 初午の祠に猫の大欠伸 大山 賢太
- 太陽光待ちて探査機春眠す 八木 和子

II 地区動向・消息 II

1. 1月10日(水) 会計監査 9名参加
2. 1月17日(水) 部長会議

3. 1月17日(水) 拡大幹事会

令和5年度の事業報告・収支報告、令和6年度事業計画・予算、役員等選出について、運営基金について、第42回総会について、俳句大会委員長選出等

4. 新会員紹介

松澤 芯老 藤沢市
保里よし枝 大和市

安藤久美子 茅ヶ崎市

5. 新会友紹介

安野 収 横浜市西区

6. 会員の動静

郷 芭行 小田原市(地区内移転)

7. 逝去謹悼

由田 欣一 藤沢市 令和5年11月

綾野 南志 川崎市多摩区 令和6年1月

《編集後記》

◎第40回俳句大会の講演録を掲載しました。湘南サンシャイン句会の吟行は大盛況のうちに終わりました。

◎会報164号では「夏的一句」を募集します。データによる写真の投稿も歓迎。5月20日締切です。

発行所 神奈川県現代俳句協会

発行人 芳賀 陽子

編集人 杉 美春

〒252-0325

相模原市南区新磯野4-4-1-506

電話 090・6534・1452

Eメール miharusugi@jcom.home.ne.jp

事務局 佐藤 久

電話 090・6587・0113

Eメール hisashi36@fj9.so-net.ne.jp

印刷所 (有)湘南グッド

